

# ムカシの競馬を読む

平成8年・中山競馬場  
スプリンターズステークス  
優勝馬：フラワーパーク

© JRA



## 第135回 10年・20年・30年前の12月

いまから10年前、平成18年の12月というと、中央はディープインパクトのラストラン、地方はばんえい競馬の廃止騒動で一色という状況だった。

ディープインパクトが有馬記念で引退戦を飾ったのはご存知通りだが、それに先立つて高額シンジケートや種付け料も話題となっていた。平成18年12月9日付のディリースポーツから引用しよう。

「国内史上最高の51億円でシンジケートが組まれた、ディープインパクトの初年度種付け料が、社台スタリオンステーションによつて1200万円と発表された。父サンデーサンデーの初年度の種付け料が1100万円で、早くも父を超えるライバーピー。父は最高3000万円にまで高騰したが、産駒の活躍次第ではディープが上回る可能性もある」

SS最盛期には後継種牡馬がサンデーサンデーの種付け料を上



# ムカシの競馬を読む



1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレッドのトモエゴゼンが、金沢と南関東で1966年から67年にかけてつくった26連勝を更新する」しかし結果からいうと、ハッコウ

回ることなどないだろうと思つたものだが、実際にディープインパクトは肩を並べるところまで来ているわけだ、やはりいたものである。

ディープインパクトが有馬記念を制した後にはこんな記事が、12月26日付の東スポーツから。

「ディープインパクトの有馬記念制覇→引退に熱い涙を流したファンは多かつたが、株式市場は意外に冷たかった!? ディープの馬主・金子真人氏は、東証一部に上場する団研の社長を務めている。過去にディープが出走した翌日は、同社株価が90%近くの確率で上昇している。が、25日は急落。一時は前日比マイナス47円の1104円をつけ、4%以上も安くなってしまったのだ」

このとき実は団研株を買い、レース前の金曜に利確したのでよく覚えている。ふだん株をやらない人の思惑買いが進み、レース前の時点でも上がりすぎていたのだ。記事で

一方地方競馬ではこんな話題が、10日付の日刊スポーツから。

「15歳7ヶ月のオースミレバードが9日、高知競馬に出走し、戦前活躍したヒサトモの15歳6ヶ月の記録を更新した。人間なら60~70歳に相当する高齢馬ながら、レスは10頭中4着。スーザーおじちゃん馬の出走を見守るために集まつたファンは通常の2割り増しの約1000人。厩舎には高齢者からファンレターが届き、競馬場には『健康長寿祈願』のスタンプも設置された」

は、「ただ、4%以上安くなつた後は、急速に値を戻し、終値は前日比10円安の1141円だつた。一部の株主から、ディープの弟で金子氏が馬主の「ヨービギニング」に期待する声が上がつたためだ」という

「んなわけねーだろ!」といふ感じだが、こんな話が出るくらい、当時のディープインパクトチームは大きいものだつたことだ。

一方地方競馬ではこんな話題が、10日付の日刊スポーツから。

「15歳7ヶ月のオースミレバードが9日、高知競馬に出走し、戦前活躍したヒサトモの15歳6ヶ月の記録を更新した。人間なら60~70歳に相当する高齢馬ながら、レスは10頭中4着。スーザーおじちゃん馬の出走を見守るために集まつたファンは通常の2割り増しの約1000人。厩舎には高齢者からファンレターが届き、競馬場には『健康長寿祈願』のスタンプも設置して、いまでも残つてゐる」

当然ながらこの後は走るたびに日本記録更新となるわけで、翌年9月に得た勝利が最高齢優勝記録(16歳5ヶ月)最後のレースとなつた11月の競走が最高齢出走記録として、いまでも残つてゐる。

続いて20年前、平成8年の12月。この月は20年経つても皆さんの記憶に鮮やかであろう、このレースが行われた月だ。16日付の報知新聞から。

「日本一の快速馬はフラワーパーク。スプリンターズステークスは15日、中山競馬場で11頭が芝1200mを競つた。逃げるエイシンワシン

置された」

正確にはヒサトモは戦前に活躍

(第6代ダービー馬)した後、戦後

不受胎が続いていたところ馬匹不

足の地方競馬に引つ張り出されて

15歳で出走したもの。しかし戦後の

が上がつたためだ」という

が上がつたためだ」という

が上がつたためだ」という

が上がつたためだ」という

が上がつたためだ」という

すだ

須田鷹雄

たかお

1970年東京生まれ。競馬ライター。  
レ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

トンにゴール前で並びかけたフラワーパークが、長い写真判定の末、わずか1センチの差で優勝。5月の高松宮杯に次いで春秋の短距離G1を連覇した

このハナ差判定に要した時間は10分。G1ではその後オータクスの1着同着が起きているし、天皇賞秋のウオッカ・ダイワスカーレットなどもきわどい写真判定だつた。しかし、G1での僅差写真判定というと、やはりこのレースが浮かぶ方が多いのではないだろうか。

10年前のほうでは地方競馬で新記録を樹立したオースミレバードをご紹介したが、20年前の12月も地方馬の記録に注目が集まつていた。まずは記事のほうからご覧いただこう。12月26日の日刊スポーツから引用する。

「地方・高知競馬のアラブ、ハッコウマチが、31日に行われる重賞の南国王冠(ダート2400m、1着賞金600万円)に出走、日本新記録の27連勝に挑むことになつた。現在26連勝中、昨年2月4日の条件戦から今年12月1日の山茶花特別まで、1年10ヶ月も出走し続けて負けなし。南国王冠を勝てば、サラブレッドのトモエゴゼンが、金沢と南関東で1966年から67年にかけてつくった26連勝を更新する」しかし結果からいうと、ハッコウ

マーチは新記録を樹立できなかつた。大晦日に行われた南国王冠はバイタルサインという馬の2着。年明けさらに3勝を積み増すので、こさえ勝つていれば30連勝になつたところだつた。それにして、当時の南国王冠が1着賞金600万円。いま大晦日に行われている高知県知事賞が150万円(昨年実績)だから、当時の地方競馬はまだまだ豊かだつた。

ちなみにこの年の2月、中央から足利競馬にドージマファイターが移籍し、連勝をはじめしていた。ただこの年の年末時点ではまだ8連勝。この馬が後に29連勝の日本記録を作るとはまだ誰も気付いていない。

最後にいまから30年前、昭和61年の12月。この月はメリーナイスで朝日杯を制した根本騎手が豪快なアクションで話題になつたり(ジャパンカップに来日した騎手の影響を受けたこと)、「ヨーロピアン根本」などと呼ばれた)、イギリスではレスター・ピッグットが脱税で逮捕されたり(後にサーの称号を剥奪される)といつたことがあつた。しかしそれ以上に大きいのはこの大調教師が亡くなつたことだらう。12月4日付の日刊スポーツから。

「5冠馬シンザンの育ての親で、関西競馬界の重鎮、武田文吾調教師が